

BATTLE 2 DAYS

written by HADEYA

序文

僕がどこにいるか分かるかな？ そう。有名なデートスポットの〈千葉デザニーランド〉だ。
たまにはデートを満喫したくなっちゃって、さ。で、恋人とやって来た訳。
素敵な方だぜ。セクシーな金属の水着を着て嫌がるんだ。〈スーツケース核爆子さん〉って、お名前なんだがな。
眩いた。白い歯を剥き出しにして。
「さあて、派手に序文を飾らせて貰うぜ」

……小説はな、スピードが命なんだよ。直木賞も新人賞も勘違いして嫌がる。とことん。
だからこそ俺は書いたんだ。既成概念を吹っ飛ばす為、何もかもメッチャメチャにしてやる為、な。キメの台詞は
こうだ——

ウザってえゲス共、出しゃばるんじゃねえ。ってな。

金なんか要らねえよ。評価も人気も何もかも。どいつもこいつも吹っ飛ばしてやる。デザニーランドの次は……いつ
けね！ 起爆スイッチを押しちまった！ み～んな、あの世へ急降下。
一緒にデートしようぜ。で、こう叫ぶんだ——**YEAHHHHH!** ってな。

これが序文の男からの宣戦布告。
はっ！ 最高に、ご機嫌なオープニングじゃねえか！

26年3月21日 自宅にて
キリミハデヤ

2

否定する。自分を。このままじゃあ衝動殺人になっちゃうからな。冷静になろうぜ、冷静に。
学校の先生だって、言ってたろう？ 新しい朝が来ました、ってな(ニヤリ)。

SNSを見る。誰も彼もが掲示板で盛り上がって嫌がる。一層の事、俺でも話題にしてみろよ。自分の顔と実名を晒
して、な。その度胸はねえんだろうよ。そう思うが、気のせいかな？ (ニヤニヤ)

床屋に行った。モヒカン刈りにキメた後は最寄りのマーケットに足を運んだ。

菓子一つを万引きし、店を出るまでの間、考えていた……と言うより否定していた。自らの行動原理を。否定否定、また否定。

「ちょっと、いいですか？」

中年女性が俺の左腕を掴んだ。万引きGメンに違いない。咄嗟に横っ面を殴って、逃げた。自分自身を否定しながら。と思うと、立ち止まる。

俺の人生、これで良いのか。本当に、これで良いのか。

「分からない……」

上空では暗い雲がドンヨリしている。明日も明後日も人生は続く。翌日も、その翌日も。間違えている——結論付けた。

目の前にパトカーが急停車した。背後に迫る万引きGメン。呆気なく、俺は逮捕された。接近した警官に、そっと耳打ちをする。

——死ぬぞ、お前ら。

3

「何故、万引きを？」

無駄な調べが続いている。依然、俺は黙秘権を貫いている。

「何とかして貴方を救いたいです。このままでは裁判で不利になってしまう」

ホザくな。心の中で訴える。目付きの鋭い鮫のような刑事が俺の目を直視する。

「ですね、調査の結果——」

間もなく、だ。計算が正しければ、間もなく事件は起きる。唐突に起こる。

目を直視しながら警官に尋ねた。

「今、何時ですか？」

「14時59分です」

「残り一分で勃発します」

「……何が勃発するんですか？」

ドカン！ ドアが蹴破られた……最愛の女性〈スーツケース核爆子さん〉がショットガンをブツ放した。室内は阿鼻叫喚の地獄絵図。

そこから先は待ったなし。走りながら叫んだ——

ケツに火が点いたら最後、走るしかないぜ！

白と黒のスポーツ・カーで飛ばす。パトランプを乗せたスポーツ・カーで。白バイの追跡を回避しながら車ごとショッピング・モールへ突っ込んだ。

周囲は警官隊に車両包囲されるに違いない。一体、どうやって突破すると言うのか??

.....ここで事態は意外な展開を迎える。余りにも.....余りにも風変りな展開の為、どうしても語らずにいられない。

それは、こんな感じだ。

*

「お前たちは完全に包囲されている！」

サツが叫んだ。勿論、従うつもりはない。絶対に。どうにかして、この局面を脱出する必要がある。

「こっちだ！」

振り返った。謎の覆面男に脱出を招いて貰う事になった。何故かは自分でも良く分からない。

純度マックスのアドレナリンをキメた。現代に欠ける至高のドラッグ。。

ミスターXの手からポンプを引っ手繰り、そのまま左首の頸動脈にブチキメた。

銃撃戦を展開し、ドサクサに紛れてバックレた。

白と黒のスポーツカー(パトカー)で突っ走る。窓は全開。上半身に当たる夏風が溜まらなく心地良い.....。

*

テーブルの皿にドッサリと置かれたキノコ。

「召し上がれ」

彼女が言った。素手で俺はマジック・マッシュルームを口にした.....ハイになる。

重力から解き放たれ、フワリと身体が宙に浮く。上空には燦々と太陽が輝き、そよ吹く風が心地良い。

遠くから<何か>がやって来た。徐々にサイレンが聴こえて来る———パトカー。

逃げようとした時だった。心臓発作が生じたのは。

ドン!音がした。病室———心臓に電流が走った。

.....今際の夢を俺は見ている。居間で俺は横たわり、笑っている。突如、室内の電気が明滅し、笑顔が泣き顔に変わる。同時に重力が重くなり、落下した。待ってました!と言わんばかりに警官の一团がマンションに突入する。

「麻薬取締法違反の現行犯で貴方を逮捕します」

ハッ、と意識を取り戻す。ここはどこだ.....俺は交差点のド真ん中に倒れている。周囲はパトカーが完全包囲していた。

「武器を捨てろ！」

力を絞り、後ろ腰からハンドガンを抜いた。覆面スポーツカーの中で核爆子さんから渡された自殺用ピストル。

「繰り返す！ 武器を捨てなさい！」

.....これで終わりだ、何もかも。記憶と共に生きた人生。狂気の人生、それも終わる。だが終わらせるのは連中の手によって、ではない。俺の手によって、だ。

銃口を顎の下に宛がった。上空を仰ぎ見る。夏の夕焼け空を。俺が目にする地球最後の光景.....

警官が叫んだ———撃てえ！

ど・う・じ・にビルの屋上から突き飛ばされた。アスファルトを目掛け、一直線に落下し———そこで女性に首を絞められ、口をパクパクさせながら———コカインのODで鼻から血を流し———白銀の刃でメッタ斬りにされ———超過激ナイトメア。これが俺の作風だ。

有終の美を飾る.....最後はやはり派手にキメる。派手にKILL YOU、派手にKILL ME！

気付けば、薄暗い牢で鉄柵を掴み、金切り声を上げていた。

「ここから出せ！ ナイトメアを終わりにしろ！ 早く！」

メカノイズが聴こえ、振り向いた。大きな丸ノコが回転する音だった。丸ノコはゆっくりゆっくり、こちらに接近して来るではないか。

悲鳴と絶叫が木霊する。牢獄に。悲鳴は決して鳴り止まない.....。

.....そろそろ、この作品を終わりにしよう。しかし俺の活動は続く。永遠に続くのだろう。

何故、俺は書くのか。

かつて俺は意味を見出せなかった。しかし今は分かる。分かり過ぎるくらい分かる。俺は人々に〈体験〉を与える為に書くのだ。スリル、と言う名の強烈体験を。

スリルは人を動かす。芸術が人を変え、市民が世界を変える。

そこに俺は書く目的を垣間見る。

優れたストーリーを伝えるべく、俺なりのメッセージを込め、俺は———

書く。

何故だろう.....キー入力を終えた俺の右手にはピストルが握られている。自殺しろ、とでも言うのか？

首を振った。ピストルを捨てて笑った。ヘラヘラ、と。

良く言われた、さ。お前は不気味な野郎だ、って。その通り、本当にその通り。これで終わりだ、これで一巻の終わり。

キャリアが終わる。最高だろうが??? 違うか???

もはや何も感じないし、何も考えちゃいない。それでも俺は満たされる。何がしらの満足を得て、再び明日へ向かう。ロマンを求め。

弛まぬ努力で描き続ける。俺自身の世界を。血塗られた人生の全てを。そして辿り着く。アーティストだけが着く美の別天地——

極み、と言う名の境地へ。

警察官が叫んだ——**撃てえ!**

それより速く、トリガーを引いた。ブツ放した——俺、を。俺自身の全てを。

同時に俺はハチの巣になり——

.....ブツ放せ、お前等。お前等の世界をブツ放せ。

お前なら出来る。俺に出来て、お前に出来ない事なんて存在しない。貴様を取り締まるサツ共を皆殺しにしろ。殺っちまいな。

言うべきは一つ——**COME ON YOU, SUCKERS!**

で、決まりだぜ。

バキューン! 聴き慣れた、お約束の銃声がして——(了)

キリミハデヤ

hadeyakirimi@gmail.com

81-080-9832-0574

モリカワ ケンタロウ 口座番号

三井住友銀行(店番号232) 普通口座 口座番号:7342872